

俺達とその名はサイヤ  
人

厄丸

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

フリーザを倒し死んだと思われていたラカノン、あの世では色々あつたようでその分  
不思議な力を身に付けて蘇ってきた！ラカノンの体は宇宙の藻屑となつたのだが生き  
返れたのはポルンガの粋な計らいだろう、蘇つたのはいいが目の前に広がる光景は闇、  
そこからどうやって出るのだろうか・・・

# 目 次

復活のラカノン！新たに始まるドラゴンワールド！	29
感動の再開！ベジータが超サイヤ人に？！	1
↑おまけ	
招かれざる脅威！フリーザの兄と父親！	4
激突する力と力！悪の親玉打倒せ！	8
12	
ラカノンが負ける?!怒れ小さな乙戦士！	16
修行開始	62
s 超サイヤ人ラカノン！	22
史上最悪の兄弟喧嘩！超サイヤ人悟飯v	
ラカノンと悟空とベ	
ギクシャクした家族！ヒビの入った孫一家！	36
勃発する喧嘩！目を覚ましやがれラカノン達！	42
決着が着く戦い！見せろ覚醒したその力！	49
修行の幕開け！みんなで修行大合戦！	56

未来から来た戦士！ダニイ?!ブルマとベジータの子供?! 29

聞かされる未来！破壊と惡意の人造人間！ 36

ギクシャクした家族！ヒビの入った孫一家！ 42

勃発する喧嘩！目を覚ましやがれラカノン達！ 36

決着が着く戦い！見せろ覚醒したその力！ 49

修行の幕開け！みんなで修行大合戦！ 56

ジータ編

67

修行開始

ラデイツツと悟飯とヤム

チヤ編

71

修行開始

コルドとクウラと天津

飯とクリリン

75

見せつけられる力！気を感じない人造人

間！

79

変えられた未来！人造人間19号！

82

圧倒的な帝王！俺様がクウラ様だ！

89

# 復活のラカノン！新たに始まるドラゴンワールド！

「（）・・・は・・・？！そ、うだ！俺あの世にいたはずじゃ！つて（）ど、だよ・・・」

ラカノンは突然目を覚まし、辺りを見渡す、視界に入る光景は闇闇闇、真っ黒に覆われているとても嫌な感じがする気だ

「嫌な感じがする、なのに悪い気だとは思わない、何故だ・・・まあいい、取り敢えずは体のチェックだ」

そう言つて気弾を作り投げる、放つ、纏う、界王拳も使えるし超サイヤ人にも慣れる、だつたらやることは1つだ

「よし、ここに居ても仕方がない、ハアー！さつさと出るか！」

ラカノンは超サイヤ人に変身し、取り敢えず大きな気弾の塊を作る

「ここだつて無限に広がつてゐる訳じやない、どこかしら限界があるはずだ、まずはそれを見つけないとな」

大きな気弾を自分の必殺技の様に激しく回転させる、壁に突き当たれば何かしらの音が聞こえるからだろう

「1つじや足りんか、だつたらもう4つぐらいで良いか！そおれ飛んでけ！」

1つに4つ足して5つの気弾をを周りへと飛ばす、大体5分ぐらいだった後だろうか、ガツン！つと音が聞こえた

「おつと、あそこだな？その前にこの闇をなんとかしないとな！そうだなあ、気が感じられるなら元気玉の要領で集められるな、生き物つて訳じやないだろうしな」

ラカノンは腕を上げその闇を集め始める、案の定気は集まり、周りは見える様になつた

「よつし！つてここどこだよ、闇が取れたら今度は光か？随分と極端な世界だなおい」舞空術を使い音がなつた方へと飛んで行く、その先にあつたのは砂時計をモチーフとされた神殿の様なものだつた

「ここが音の原因か、やべ、上の時計削れてる、あちやー俺の気弾のせいか、それに真ん中のあのドア、すげえ氣になる・・・」

その建物の中心にあつたのは1つのドア、ラカノンはそれに手を掛けようとするがその前にやる事があると気づく

「あぶねえあぶねえ、超サイヤ人を解いておかないと、後はこの闇か・・・うくん・・・碎け散れえ！！！」

闇に気を送り爆発させる、その技はベジータがかつてキュイにやつた技だ

「これで良しつと、さて！開けますか！」

ラカノンがドアを開くとそこは見慣れた景色が広がっていた、神様の神殿、目の前に広がる天界、そして・・・

「おいラカノン、ここで何してる」

「うおい！ ピックリしたあ！ ポポか！」

ミスター・ポポが居た、どうやらラカノンが出てきたのを一瞬で感じ取れたらしい  
「やつぱりポポはすげえな、俺じゃ勝てんな」

「何言つてる、フリーザ倒した人間、勝てる訳ない」

ポポの言うことは正論、それをバツが悪そうに顔をそらし次の二言目は・・・

「ポポすまん！ 僕腹減った！ なんか飯になる様なもんねえかな?!」

「相変わらず、待つてろ、今持つてくる」

それを心待ちにしていたラカノンは急いで食べ始めた

感動の再開！ベジータが超サイヤ人に？↑おまけ

—  
•  
•  
•  
—

ラカノンは天界で飯を食つてゐる、ラカノンにとつては久しぶりの地球の飯なのだ、かつこんで食べていても仕方がないだろう

「ブツハア！ 食つた食つた！ サンキューなポポ！」

「お安い御用……ラカノン……客が來てるぞ」

「客？ そういえば知つて いるよ うな 気が—— ゲブハア!!!」

ラカノンの腹に小さな影が飛びついでくる、その影の速さは異常でラカノンは天界の

壁にめり込んでしまつた

「つてえ！なにすんだ！つて悟飯！悟飯じやないか！」

「テガノンにいたやんよかーだあああああああ!!」

その客とは悟飯のことだつた、悟飯だけではなく他の乙戦士もやつてきた

ラカノン!!

「よお！みんな久しぶり！」

「ラカノンあの時はヒデエぞお！しかも死んじまうなんて・・・オラ怒つてんだ！」

みんなが駆け寄つてくると悟空が困つた顔をして寄つてくる、それについてはラカノンがバツが悪そうな顔をした

「仕方ないだろ！悟空には家族がいるじゃないか！それに俺はフリーザを倒せたんだ、本来ならそれだけで十分なんだよ！」

「ツ！ふざけるな！オラ達が家族じゃない？いい加減にしろ！」

「いってえ！やつたな?!お返しだ！」

「グツ！こっちだつてお返しだ！」

「甘い！ハアアアアアアアア!!!」

「こっちだつて！ハアアアアアアアア!!!」

2人は盛大に喧嘩をする、その余波は凄まじくピツコロとベジータがみんなを多い囲むようにバリアを張るほどだ

「どうすんのよこれ！本格的にはじめちゃつたじやない！」

「放つておけ、2人とも不器用なんだ、ラカノンは悟空達を尊重したが悟空はラカノンを守りたかつたんだろう、それが言えないからこそああやつて喧嘩になつてているのだ」

ラカノンは悟空達家族を守りたかつた、悟空はラカノンを家族だと思つて接してきた

し過去の話も聞いて尚更一人にさせないようにと思つたのだろう

「ラカノンはいつもいつもそうだ！俺達に秘密にして勝手に突っ走つて!!だからいつも心配なんじやねえかあ!!!」

「悟空だつて！ 家族がいるつて何度も言つてるだろ!! なのに悟飯やチチさんにさびしい  
思いをさせてふざけんなあ!!!」

「おいらカノンカカロツトやめろ！ 天界が壊れてしまうぞ！」

ベジータが仲裁に入るがそんなことはお構いなしだ、さらに激しさを増していく

「うるせえベジータ！ほつといてくれ！」

「そうだ！いいからバリアに入つていろ！」

「チツ！いいからやめやがれ！」

「うるせえぞ!!」

「この俺様が・・・下級戦士にいいいいいい!!」  
ラカノンと悟空の拳がヒットする、その衝撃でベジータは天界の床に叩きつけられる、ベジータは自分がなすすべなく叩きつけられたことにイライラしている

ベジータの周りを激しいスパークが走る、その光景はラカノンと悟空が覚醒した時と同じような光景だ

「ガハア!!!」

超サイヤ人へと覺醒したベジータの鋭い当身で2人は氣絶してしまった、ベジータは超サイヤ人から普通の状態へと戻り2人を置いてバリアをそつと解いた

# 招かれざる脅威！フリーザの兄と父親！

「ふふつふふつふふん・・・・？」

「よいっしょ、よいっしょ・・・あれ？」

「この気・・・フリーザ？いや違うな・・・悟空！」

「ああ分かつて！行くぞ！」

ラカノン達は気の元へと飛んでいく、そこにあつたものはフリーザの宇宙船と全く同じもの、だが乗っていた気は別物だった  
「お前ら何もんだ、フリーザの親族か？」

「・・・」

小さい方は喋らない、そのかわり大きい方が喋った

「これはこれは機嫌麗しゆう、薄汚いサイヤ人」

「ほう・・・いきなりの罵倒とはいき趣味してねえな、名前は？俺はラカノンだ」

「オラは悟空・・・」

相手に名前を名乗るときは自分から、律儀にそれをしたラカノンは相手からの返事を

待つ

「これは失礼、私の名はコルド、フリーザの父親だ」

「俺の名はクウラ、出来損ないの兄だ」

二人はフリーザの親族だった、それを聞いてラカノンは納得していたが悟空の額に青筋が浮かんでいる

「・・・フリーザは家族じゃないんか？」

「あいつが息子？ ハツハツハ！ 笑わせるな！ あんな出来損ないが息子だと？ あいつは一族の面汚しだ！」

「あいつの兄だと思うと本当に恥ずかしい、あいつは兄弟ですらない！」

「・・・酷いいいようだな」ボソッ

コルドとクウラの言い様にラカノンは呆れを覚え悟空は更に怒りを膨らませる  
「おめえらあ・・・！」

「ふん、なんだ？まさかキレるのであるまい？」

「待て悟空！」

悟空はついに怒りが抑えきれなくなり気を高める、必死にラカノンが抑えようとする  
がもう遅い

「ゆるさねえぞおおおおおおお!!! ハアアアアアアアアア!!!!」  
「待つてつて！ チツ！ ハアアアアアアアアアアアアアア!!!!」

悟空が超サイヤ人になり遅れてラカノンも超サイヤ人へと変化する、それを見てコルドとクウラは驚いたがすぐに体制を立て直し戦闘態勢に構える

「てめえらは絶対にゆるさねえ! 自分の家族をなんだと思つてんだ!!!」

「家族だ? 出来損ないの家族は一族にいらん!!!」

「残念だかその通りだ! 貴様らの考えなど知らん!!!」

コルドとクウラは火に油を注ぐように悟空の怒りを煽つていく、悟空は更に力を入れ界王拳を使つてしまふ

「テメエラアアアアアアアアアアア!!!!」

「やめろ! 界王拳はやめろ!!! ツチ!!! すまない悟空!」

「ガハアツ!」

ラカノンは悟空を気絶させ自分の家にへと投げる

「賢明な判断だな、だが愚かでもある」

「たつた一人で俺たちに勝てるとでも?」

ラカノンは口元をにやりとあげ言葉を発する

「俺はいつ『一人』だと言つた? あと一人いるんだよ」

「「なにい・・・?」」

ラカノンの言葉を待つていたかのようにラカノンの後ろから巨大な気弾が飛んでく

る

「ピック・バン・アタック!!」

その巨大な気弾をコルドとクウラはよけ、後ろに後退する

「ふん、フリーザに父親と兄貴がいたとはな」

「ナイスだ『ベジータ』いいタイミングだ」

「貴様のためではない、自分の超サイヤ人の力を試したいだけだ」

ラカノンが言っていたもう一人の戦士、それはベジータの事だつた

# 激突する力と力！悪の親玉打倒せ！

「それじゃあ行くぞ!!!」

「かかって来い！」

「うす汚ねえ猿が！」

ラカノンとベジータはコルドとクウラとぶつかり合う、力と力の衝撃波が回りへと逃げ岩や地面をえぐっていく

「二人じやラチがあかん！貴様はでかい方をやれ！俺は小さい方をやる！」

「分かった！へまするなよ！」

「俺はサイヤ人の王子だ！侮るなあ！」

二人は戦うべき敵を分散して更に戦いをヒートアップさせる

「ツク！猪口才なあ！」

「おつとお！甘いぜクウラ！フリーザはもつと強かつたぞ！」

「どうしたデカブツ！その団体ではこの俺様のスピードに付いてこれないかッ！」

「ヌウッ！」

超サイヤ人の二人はコルド組を徐々に押していく、ラカノンの実力は相変わら

ずだがベジータもあの後特訓を重ねていたようでラカノンに近い実力になつてゐる

「超サイヤ人の力がこれほどまでとはッ！」

「行くぞベジータア！」

ラカノンとベジータは気を高め必殺技を放とうとする、それを見てコルド達も同様に必殺技で打ち返そうとしている

「スパニッシュユバスター！」『ギャリック砲』

『テスピーム!』『スバーノヴァ!』

ギヤリツク砲とスパニッシュバスターが合わさり、更に貫通力が増したギヤリツク砲となつて直進する。コルド達の必殺技はクウラのスーパー・ノヴァにコルドのデスビームが重なり合いスピードの増したスーパー・ノヴァとなつてラカノン達に襲い掛か

る

特大なギヤリツク砲はスーパーノヴァを押し返そうとする、しかしコルド達も負けじと威力を高めるので押し返せない

「サイヤ人の・・・王子を・・・!」

ベジータは更に気を高めて自分のギヤリック砲を更に大きく強くする  
「なめるなああああああああああああああああああああ!!!!」

ベジータの氣力勝ちで必殺技戦はラカノン達が勝利した

「ふん、口ほどにもない」

「いや・・・どうやら更にピンチになつてしまつたらしい」

「ダニイ?」

『よく分かつてゐるじやいか、流石戦闘民族サイヤ人といつたところか・・・』

煙の中からドス黒く更に気を高めたコルドとクウラが出てくる、両方の顔には嫌な笑  
顔が浮かんであり更に絶望させるようなことを言い放つ

「フリーザがどうやつて貴様らを追い詰めたのか忘れたのか?」

「私達はフリーザの親族だぞ?変身だつてできないことはない・・・!」

「これが・・・俺達の・・・!」  
「変身だあああああああああああああああ!!!」

コルドとクウラは変身を終え、こちらを睨んでくる

「これが俺達の変身した姿だ・・・!」

「どうだ？うつしいだ r 「オラアツ!!!」 ガハア！」

ラカノンが先制攻撃でクウラを殴り飛ばす、その様子に敵であるコルド、殴られたクウラ、味方であるベジータでさえも目を見開く

「話が長い！ テメエら一族はそうやつていつまでもベツラベラと話しやがつて！」  
ラカノンは更に力を込める、その気には赤みが含まれており、更に輝きをます

ラカノンが何故こんなにも長い話が嫌いか、それはこの前悟空と喧嘩した後のことだ、結局チチにも怒られてしまいそのまま寝てしまつたつまり……

「「「ハアアアアアアアアアアアア  
??!!」」

八つ当たりにしてはやりすぎだと思うが話が長い方も悪い

「覚悟しやがれ！ 完膚なきまでに叩きのめしてやる！！」

超界王拳を使ったラカノンはベジータを置いてコルド達に突撃していく、不意を突かれてすぎたコルド達は反応できずに殴り飛ばされてしまった

ラカノンが負ける?!怒れ小さな乙戦士!

「宇宙のトカゲ共が調子にのんなあ!!!」

「誰がトカゲだ!!!」

クウラ達をトカゲと表しながらもラカノンは金と紅の混じった気を纏いながら突進する、ベジータも突撃するがラカノンのスピードについてこれない

「グツなんて速さだ・・・界王拳自体は知っていたがこれほどまでとは・・・」

「オラオラオラア！そんなもんじゃ俺の速さにはついてこれんぞ!!!」

「チイツ！野蛮なクソ猿ガア!!!」

「待てクウラ！そのまま突進するでない！」

ラカノンとクウラの殴り合いが始まる、カウンター、フック、ストレートなどとボクシングの技を使いながらもしつかりとロー・キックやハイ・キックなどの蹴り技も使う

「クソッ！速すぎてついていけん！」

「隙ありイ！でえりや!!!」

「グハアアア!!!」  
口を開き隙を見せる、その一瞬のすきをラカノンは見逃さない

顔面にストレートをモロにくらい、顔の装甲が剥がれ落ちる

「この……お……れさ……まが……！」

クウラはすでに虫の息、ラカノンはクウラに止めを刺そうとする、しかし——

「グツ……！なんだ……これ……はあ……！」

急に心臓が痛くなる、急に締め付けられるような苦しさと痛み、これはまるで心臓病みたいだつた

「どうしたラカノン！さつさと止めを刺しやがれえ！」

「やろうとは……してんだよお……！」

気を集めることで集中できない、それどころか苦しさと痛みが増していき超界王拳、超サイヤ人と変身が解けてしまう

「隙あり!!!」

コルドのデスビームが無残にもラカノンの心臓を貫く、ラカノンは力無く倒れていき、地面にクレータを作るほどの高さから落ちた

「ラカノン!!!」

「これで一匹……ククク……ハーツハツハツハ！超サイヤ人も脆いものだな！これで貴様だけだぞ？ベジータ王子！」

ベジータは舌打ちをする、コルドだけならまだしもクウラもいる、クウラに至つては

「ラカノンが超界王拳を使い圧倒していたが普通の状態じゃそうはいかない  
『万事休すか……?』

ベジータは一つの気を感じる、サイヤ人の血を持ちながら戦闘は嫌いと言つている力  
カロットの甘えたガキの気……

「ラカノン……兄ちゃん……?」

孫悟飯の気であつた

「ラカノン兄ちゃんッ!!!」

悟飯は今さつきカリン様からもらつてきた仙豆をラカノンの口の中へと入れる、仙豆  
を飲み込んだラカノンの体はみるみるうちに回復していった

「これで安心だ……」

それとは裏腹に悟飯の戦闘力が上がっていく、ナメック星にいた時よりも遥かに高い  
戦闘力、その状態は超サイヤ人になつていらないラカノンを軽く超えるほどのものだ  
「よくも……よくもラカノン兄ちゃんを……!」

気の色が白から紅へと変わる、界王拳だがその上昇率は異常だ、その倍率は――

「許さないからなあああああああああああ!!!」

――30倍――

「な?!カカロットのガキに何故これほどまでの戦闘力が?!」

「うああああああああああああああ!!!!」

悟飯は叫びながらコルドに突進していく、突然のことでコルドは反応に遅れる、そしてコルドはあることに気づく

(一撃一撃が強くなっている・・・)

悟飯の倍率は上がつてはない、ただ相手の急所を殴るたびに狙つてているだけだ  
「調子にのるな猿の子よ!!」

「お前こそ！絶対にタオシテヤルッ!!!」

殴るほどに腕が動かなくなる、足が動かなくなる、それでも勢いは休めない、自分の慕つている人が、大好きな兄が、憧れている人の仇をとるために

「さつさと失せろ！貴様もそこにいるゴミクズのようになりたいか！」

今こいつはなんて言つた・・・？

「取り消せよ・・・！」

「何をだ？何を取り消すのだあ？」

動かなかつた腕に力が入る

「ゴミクズて言つたの・・・取り消せよ！」

「そこ」にいるゴミにか？ゴミにゴミと言つて何が悪い！」

動かなかつた足に生気が灯る

20 ラカノンが負ける?!怒れ小さなZ戦士!

(もう駄目だ・・・やめてくれ・・・これ以上・・・兄ちゃんをバカにしないでくれ・・・  
じゃないと・・・じゃないと・・・!)

「親が親なら子も子だな、貴様の父親も無様なもんだつたぞ!」

ああ・・・もう駄目だ・・・

「ツ!!!」

怒りに身を任せよう・・・

コロス

「ウガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!!!!!!!!!!!!!」

小さなその体に特大な気が宿る

髪は輝く金色へと

目は怒りが灯っている瑠璃色へと

小さな体から発せられるその殺気はこいつを必ず殺すと物語つている

「な、なんだ・・・この力は!!!」

「チツカカロツトのガキも覺醒しやがつた、だがこの力は……」

そう、その力は——

「俺とラカノンの戦闘力を軽く超えてやがる……！」

超サイヤ人 孫悟飯 爆誕

史上最悪の兄弟喧嘩!超サイヤ人悟飯 v s 超サイヤ人ラカノン!

「もう許さない・・・殺してやるッ!!!」

覚醒した悟飯はコルドへと突進していく、先程の突進とは違いスピードも段違いだ  
「は、はやいッ!」

「お前なんか死んでしまええええ!!!!」

悟飯のラツシユが腹に決まる、その一撃はラカノンよりも強く深々と腹に刺さるもの  
ばかりだ

「グフウッ・・・」

「・・・」

倒れ込んだコルドを悟飯は見下ろす、腕、足、腹へと刺さつた鋭い一撃はコルドを跪  
かせるのには多すぎた

「死ね」

悟飯のこの一言、コルドは殺されることを覚悟した、しかし――  
「なんで・・・なんでなんだよ!」

「チツまさか起きるとはな、随分と速いお目覚めじやないか」

「『ラカノン（兄ちゃん）！』」

コルドの前に立ちはだかるのはラカノン、その目には悲しみが渦巻いている

「悟飯、俺はガツカリだ」

「な、なんで?!」

それとは裏腹にコルドは混乱する、そもそもそうだろう、今まで自分を殺そうとしたやつが自分を助けるのだから

「コルド、この星で暮らしてみる気はないか?」

「・・・なんだ・・・と?」

さらに困惑しながらもラカノンは続ける

「この星はいいぞ? 食いもんも美味いし酒もある、もう大王なんて辞めてゆつくり暮らしたらいいじゃないか、クウラもフリーザもだ」

「・・・」

この男は本当によく分からない、だが・・・確かにそうこの星はいい星だ・・・

「そうだな・・・もう、疲れてしまつたわ・・・」

「おう、よろしくな、そしてようこそ地球へ」

コルドから笑みがこぼれる、しかし、納得しないやつもいるようだ

「なんで！なんでなのさ！そいつらはラカノン兄ちゃんを殺そうとしたんだよ?!」

「そうだなあ、だからなんだ？」

「分からぬ、僕には兄ちゃんの考えがわからない！」

「なんで！なんで自分を殺そうとしたやつのことと許せるのさ！」

「なんであつて顔してゐるな、まあ当然だろう」

ラカノンは話を続ける

「俺はフリーザ達がやつてることは悪じやないと想い始めていたんだよ」

「は？」

悟飯とベジータの声が重なる

「それを言つたら俺たちサイヤ人だつて存在自体が悪いみたいなもんだ、じゃあ逆に聞こ  
う、ベジータのことはなんで許せた？」

「そ、それはナメツク星で僕達を助けてくれたから・・・」

「そ、その通りだ、でもやつてることはフリーザと同じだつたんだぞ？」

「・・・」

僕達は黙るしかなかつた、だつてラカノン兄ちゃんの言つてゐることは本当だか

ら・・・

「いいだろ？それに今じゃ俺達の方が強い、どの道暴れることなんて出来ないさ」

「・・・ そうだな、俺も惑星ベジータを壊されたが特には思つてはおらん、それに親父、ベジータ王は好きにはなれんからな」

「なんでベジータさんも納得出来るの?! なんで・・・ なんで・・・ !  
ああ、そつか、じやあーーー」

——僕がラカノン兄ちゃんを倒せばいいんだ——

「でりやあツ!!!」

僕の不意打ちが炸裂する、この感触だと肋骨何本か逝つただろう

「甘い甘い、まだまだ甘ちやんだな悟飯」

「ツ!!!」

「なんで?! 完璧に不意打ちだつたのに!」

「戦闘中に考え事とは偉くなつたもんだな、ハアツ！」

「グアア!!!」

「何故だ、何故悟飯の方が戦闘力が高いのにラカノンが殴り飛ばせる・・・」

「か、簡単だぞ、ベジータ王子・・・」

そこにクウラが話に割り込んでくる

「ほう、それは何故だ?」

「戦闘経験じゃ・・・」

「その通りだ、コルド、クウラ」

ラカノンは悟飯のラツシユを受け流しながらこつちを向いて話してくる

「それに俺は悟飯とは散々組手をしたんだよ、だからこそ次に来るのが予測出来る」

「ならこれはツ!!!」

これは僕とクリリンさんの技だ!

「ハア!!!」

「おっと、気円閃光弾だな?確かにそれなら俺も殺せるだろう、でも俺にも出来るんだよ、それ以上のもんがな」

俺はスペニッシュバスターの構えを取る、そしてそれを腰に持つてきてさらに貯める  
「この一撃だ、この一撃で勝つてやるよ」

「・・・」

勝った、僕はそう思った、だからこそ僕は突進してラカノン兄ちゃんの腹に穴を開けようと思った、だけど・・・

「ハアアアアアアアアアアア!!!!」

「ふむ、意気込みは十分、だけどまだ甘い」

「え？」

僕が気が付いた時には――――

・・・・・・・・・・・・

ラカノン兄ちゃんは後ろにいた

「これで頭を冷やせ!!! スパニツシユツ!!!」

「ツ!!!間に合わない!!!!」

「かめはめ波アアアアアアアアアアアア!!!!」

そのスペニツシユかめはめ波の閃光は僕の体を包み込んだ・・・

と思つていた

「あ、あれ?」

「はい、俺の勝ちな

「ふむ、あのサイヤ人中々やるな」

「ああ、何せあいつはラカノンだからな、俺ですら何をしでかすか分からん」

そう、ラカノンは・・・

「あの一撃で戦意喪失させるとはな」

28 史上最悪の兄弟喧嘩!超サイヤ人悟飯v s 超サイヤ人ラカノン!

スパニッシュ  
かめはめ波をわざと外した

# 未来から来た戦士！ダニイ！ブルマとベジータの子供？！

「はあ・・・はあ・・・！」

「残念だつたな悟飯、お前の超サイヤ人時間切れだ」

ラカノンのこの一言と同時に悟飯の超サイヤ人が解ける、最初の変身であれだけ出力を出していたらすぐガス欠にもなるだろう

「逆に言えば初めての変身で全力を出してここまで続けさせたことが凄い、だからな悟飯、ここでお休みだ」

「え？ ガハア・・・」

ラカノンは悟飯に当身を使い氣絶させる、悟飯は抵抗する気力もなく簡単に倒れる、氣絶しているときの悟飯の顔は健やかなものだつた

「さて、今度はベジータとコルド達だな、ほら、俺の気を分けてやるから元気出せ」

ラカノンは3人に氣を送る、送られた力が強大過ぎた力は力を回復するには十分だつた

「おお、これが超サイヤ人の力・・・」

「礼は言わんぞラカノン」

「・・・」

「ぼ、僕は一体何を・・・」

悟飯の意識が通常に戻つてくる、その表情からは恐れが見える、しかしその恐れはラカノンに対するものではないようだ

「力に飲まれていたようだな悟飯」

「ら、ラカノン兄ちゃん・・・」

悟飯は目を逸らす、それも仕方がないことだろう、自分は血がつながつてないにしろ自分の兄を殺そうとしたのだ、目を逸らしたくなるだろう

「ぼ、僕は・・・僕は・・・！」

「落ち着け悟飯!」

「ウワアアアアアアアアアアアア!!!!!!」

悟飯は狂つたようにその場から立ち去る、超サイヤ人にはなる力はないようだが界王拳を使つて一瞬で去る

「悟飯・・・」

「放つておけ、あいつはお前の為を思つてやつたことなのだ、まあそれをやつたのは私が原因なのだが・・・」

そういうつてコルドはラカノンを慰める、コルドも二人の子を持っている以上分かる気

持ちなのだろう

「そういうものなのか・・・」

クウラもそれについてはよく分かつていないうらしい、クウラもコルドと同じく妻と子を持つばわかるのだろうか・・・

「お前は弟にフリーザがいるだろうが」

「フリーザは俺と同じように賢いんだ、残念だが地球人やサイヤ人の兄弟とは考え方が違うのだ」

その一言でベジータは青筋を浮かべるがグツとこらえる

「おーい！ラカノーン！ベジーター！」

「大丈夫か二人とも！」

ここに他の乙戦士達が集まつてくる、ラカノンとベシータを見てワイワイと騒いでいるがコルドとクウラを見た瞬間ギョツとした表情でズザザツと下がり構えをとる

「待て待て！この2人はもう地球に住むことに決めたんだ！」

「『地球に住むだああああああああああああああ？！』」

更に驚くが2人と話している間に乙戦士達は仲良くなる、そこにカプセルコー・ポレーションのロゴが付いた卵型の乗り物が空から降りてくる

「ん？なんだあれ、おいベジータ！あれってカプセルコー・ポレーションのロゴじやねえ

か?」

「確かにそうだ・・・だがあんな乗り物はうちにはないはずだが・・・」

乗り物から降りてきた青年はコルドとクウラを見た瞬間目の色を変えて飛びかかる

「死ねッ!!!」

「なッ?!」

「待てお前! いきなり人に飛びかかるなんて言い度胸してるじゃねッ・・・」

そういつてラカノンは青年を殴り飛ばす

「かあ!!!」

ラカノンに殴り飛ばされた青年は更に目の色を変えて訴えるように言い放つ

「なんでそいつの味方をするんだ! それにお前は誰だ!」

「さつきから質問の多い奴だな、ちつとは自分で考えやがれ質問主義者!」

「クソ、こうなつたら・・・ハアアアア!!!」

そういつて青年は金色の髪、まさしく超サイヤ人へと変身した

「なにい?! 超サイヤ人だと??!!」

「お、俺達の他にも超サイヤ人になれるやつが・・・」

ラカノンとベジータは驚きを隠せない、それもそうだろう、超サイヤ人になれるとい  
うことはつまり――

「あいつもサイヤ人ってことか・・・！」

「これでなら貴様ら3人まとめて殺せる！」

超サイヤ人へと変身した青年はラカノンへと切りかかる、先にラカノンを殺した方が倒しやすいと思ったのだろう、しかしそれは甘すぎる

「おつと、お前も悟飯のように甘ちやんだな、攻撃の仕方が単純すぎるんだよ！」

「なにい？」

「お前にこれを見切れるかな？残像拳ツ！」

ラカノンは相手を翻弄するように戦う、青年はあわてて残像を一人ずつ消していくしかない

「クソ、クソ!!!

「ふむ、上手いな」

「ああ、確かに上手い、相手を翻弄するように戦っている」

「だろお？あんな風に戦うの得意なんだぜ」

「は？」

隣には戦っているラカノン本人がそこにいた

「き、貴様何故ここにいる！」

「簡単簡単、そこにはいるのは残像、俺が本物、今でも高速で動いているんだぜ？ w」

「あ、呆れた根性の持ち主だなお前・・・」

上からクウラ、ラカノン、コルドの順で話を続いている、それを見てベジータとブルマを含んだ乙戦士たちは更に呆れる

「全くあいつったら・・・」

「俺も地球に来たときあんな戦い方されたからな、なんだか自分を見ている気分だぜ」  
「そんなことを話していると青年からは疲れが見えてくる

「ほらほらどうした?」

「疲れが見えているぜ?」

「こつちだこつち」

「はあ・・・はあ・・・!」

「もうそろそろいいか」

俺は残像拳を解いて青年へと歩み寄る

「どうした? 力の力量も見切れないようじや相手に勝てないぜ? 超サイヤ人にならないとコルドやクウラに勝てないだろ」

「今だ! ハア!!!」

青年は即座に後ろに離れ特大のエネルギー弾を放つ、それに対してラカノンは反応が出来ない、しかしそれは普通の状態ならだ

「残念だつたな、お前だけが超サイヤ人になれるわけじやない」

そういつてラカノンは即座に超サイヤ人になりそのエネルギー弾を弾く、それを見た瞬間青年は糸が切れたように超サイヤ人が切れる

「やつと落ち着いたか、ほら、仙豆だ」

青年は受け取った豆を口に放り込む、初めは疑つていたようだが傷が一瞬で癒えたことに驚きを隠せないようだ

「あ、ありがとうございます」

「礼はいい、お前の正体は？気を見た感じベジータとブルマの氣を感じてるんだが？」

それを聞くと青年は観念したように口を開いた

「はい、俺の名はトランクス、ベジータさんとブルマさんの息子です」

「ダニイ!!」

いやお前自分で言つてたじやん↑主の一言

# 聞かされる未来！破壊と悪意の人造人間！

「まあ、今のところはお前がブルマとベジータの子供だということを信じよう」

「ありがとうございます！そしてすいません、あなたは誰なんですか？一瞬でしたが超サイヤ人になつていましたが・・・」

トランクスの疑問はもつともだろう、本来なら今の時間軸ならば超サイヤ人は孫悟空一人だけなのだ、なのに超サイヤ人がもう一人いれば疑問にも思うだろう

「ん？未来には俺はいないのか？なぜだ・・・あ、すまん、俺の名はラカノンだ、よろしくなトランクス」

「はい！よろしくお願ひします！」

俺達は互いに握手を交わす、これで友好関係にはなれただろう

「みなさんすいません！あともう少しで孫悟空さんが来ます！一緒に行きませんか?!」

「何言つてんだ？悟空なら家で寝てるぞ？」（寝かしたの俺だけど）

それを聞いてトランクスは驚いてしまう

「そんな?!ま、まさか歴史が変わった・・・？」

「？歴史が変わったかなんだか知らんがどういうことだ？」

トランクスは「それもかねて話します」と言つて乙戦士の所を離れる

「それではラカノンさん、超サイヤ人になつてもらつてもいいですか？」

「いいぞ、ハア!!」

トランクスに言われるまま超サイヤ人になる、それを見てトランクスも再度超サイヤ人へと変身する

「これでいいのか?」

「素晴らしい気だ・・・! ラカノンさん、俺と手合せしてもらつてもいいですツ・・・か!!!」

不意打ちで剣で切りかかられる、しかしラカノンはそれを避けない

「余興はいい、さっさとかかってきな」

「流石です、それでは・・・今度は本氣で切りかかりますツ!!!」

今度は本氣でトランクスは切りかかつてくる、それを紙一重でよけていくが一閃だけよけきれなくなる

「ふんツ!」

それを指で受け止める、勿論普通に止めてはそのまま切れてしまうので氣で指をコ一  
ティングしてある

「・・・ありがとうございました」

「おう、これでいいよな?」

「はい!」

トランクスは満足したようだ、そして真剣な顔つきになると話をし始める  
「まず一つ、僕が話すことはこれから起ころる事です、信じてください」

「問題ない」

それを聞いて安心したのかポツリポツリと話し始める  
「僕は未来から来ました、先ほども言いましたが僕はブルマさんとベジータさんの子供  
です」

「うむ」

「これから先に、今から丁度三年後に人造人間というやつらが現れます、やつらは破壊の  
ことしか考えておらず、未来の世界はほとんど壊されてしましました」  
話していくうちにどんどん暗い顔つきになつていく

「それで?俺たちはどうなつたんだ?」

「チャオズさん、ヤムチャさん、天津飯さん、クリリンさん、ピッコロさん、ベジータさ  
んまでもが殺されてしましました・・・」

「なにい?俺は未来にはいなかつたんだよな?悟空はどうなつたんだ」  
この話を持ちかけると今までで一番顔つきが暗くなる

「悟空さんは・・・」

トランクスから出たひと言は驚くのに十分値する一言だつた

「戦わずして!!・・・心臓病で死んでしまいました・・・!」

「なんだつて!!」

それは驚きもあるするだろう、自分とほとんど同じ実力の悟空がなんと戦わずして、それも病気で死んでしまつたのだ

「しかもこの時代ではウイルス性、不死の病なので治すこともできません・・・」「でもそれってウイルス性なんだよな?俺もさつき心臓が痛くなつたぞ?」

それを聞くと更にトランクスは驚く

「なんですか?一度痛み始めたら死ぬまで治らないとされるのに・・・」

「あ、それ多分俺が心臓ぶち抜かれた後に直したからだわ」

「え・・・?」

呆気にとられたように口をぽかんと開いてしまう、それもそうだろう、本来なら治らないはずの心臓病、それを治したというのだから

「これだと俺が薬を持ってきた意味が・・・」

「そんなことないぜ、トランクスは悟空の身を案じて持つててくれたんだろう?だつたらそれだけで役に立つ、ありがとうな」

ラカノンはトランクスの頭をなでる、それを気持ちよさそうに、それに恥ずかしながらもそれを受け入れる

「わ、ら、ラカノンさん、皆さんも見て いますから・・・」

「そうだつたな、すまんことをした、取りあえずその薬はもらつていくぜ?」  
「はい! あ、それでは僕もここら辺で・・・」

「うう言つてトランクスはタイムマシンであろう機械に乗り込む  
「ラカノンさん、このことは皆さんに言わないでもらえますか?」

「いいぜ、任しどきな」

「人造人間は三年後に来ます、それでは三年後に!」

「ああ! 三年後に!」

「そう言つてトランクスは未来へと帰つていく、それを見てラカノンもみんなの元へ  
帰つっていく

「ラカノン! 一体どんな話だつたんだ?」

「それは俺の口からは言えないなあ・・・なあ? ピッコロ」

「・・・そうだな、だがいいのか?」

「ピッコロは戸惑いながらも俺に答えを求めてくる

「ああ『俺の』口からは言えない、じゃあピッコロが言つてくれるよな?」

それをピッコロは舌打ちしながらトランクスの話をし始めた、それを聞いて乙戦士はすぐに帰り修行を始めた、ラカノンも家に帰る途中で悟空と悟飯を回収し、チチに3人共々こつてり怒られた

# ギクシャクした家族！・ヒビの入つた孫一家！

「・・・」もぐつ

「・・・」ムシャア

「・・・」ゴクツ

(な、なんだべこの空気・・・)

その光景は異常だった、いつも仲がいい3人が飯時なのに全く話さない、それどころかお互いに目を合わせることもなく淡々と朝飯を食べているだけだ

「きよ、今日はいい天氣だな！こんな日は買い物がなんかに行きてえべ！」

「「あ、それなら俺が（オラが）（僕が）」「」

ギロツ

(な、なんでこうなるんだべえ？！)

買い物の提案をしたチチの方が焦っている、こうなれば手は1つしかない

「じゃあみんなで買い物に行くべ！そのほうが楽しいし！な？」

「そ、そうだなチチさん

「た、確かにその方が楽しそうだなチチイ・・・」

「じゃ、じゃあ準備しなくっちゃ！」

この一言を3人から聞くとチチはホツとする、だがホツとするにはまだ早い、何とかしてこの3人の仲を戻さないといけないのだ

「さ、さあ！都についたべ！それじゃあ買うもんを決めねえとな！悟飯ちゃんは何が欲しいべ？」

「トレーニング用品」

(え・・・？トレーニング・・・用品!!!)

チチは驚きを隠せない、あの悟飯がトレーニング用品を買つてくれというのだ、勉強の方は確かに追いついている、だが本当にそれを買つていいものか・・・  
「ダメなら大丈夫だよお母さん、無理なお願いをしてごめんなさい」

「そ、そんな事ねえべ！ただビックリしただけだ！」

その時、空が暗くなる、この時の暗さは孫一家が全員分かっている暗さだ  
「これは神龍？一体誰が・・・」

神龍の暗闇が一瞬で消える、消えた直後に懐かしい気が感じられる

「こ、この気は!!」

「間違いねえ！にいやんだ！つてことは使つたのはベジータだな？あいつもなかなかいいことすんじやねえか！」

ラカノンと悟空のこの喜びよう、そしてチチや悟飯にも聞き覚えがある声が空中から  
した

「おいおい、3人揃つて家族喧嘩か？チチの気持ちにもなつた方がいいと俺は思うぜ？」

「叔父さん！」

「ラディツツさん！」

そう、そこには巨漢ナッパに殺された男、服は普通の服で髪は邪魔なのか後ろに纏め  
ている

「全く、3人とも情けないぞ、今の3人なら俺でも勝てる」

「ほーう？」

「にいちゃん言つてくれんじやねえか」

「僕達は超サイヤ人になれる、叔父さんはなれないよね？」

「ちょ！ 待つてほしいだ！ 喧嘩はやめてくんろ！」

チチが声をあげるがラディツツが近づいてきて耳元でこう囁く

『俺に任せてくれ、仮にもチチの旦那の兄貴だからな』

そう言つてラディツツ達は飛んで行く、残されたチチは事情を話してカプセルコー

レーションに居させてもらつた

「さあ、誰からでもかかつてこい！」

「じゃあまずは僕から……ハアアアアアアアアア!!!!」

ラディイツツの一声で悟飯が超サイヤ人へと変身する、その時の目はコルドの時のような殺気はなく、ただただ落ち着いている

「地獄から見ていたが凄い気だな、だが俺の勝ちだ」

「そんなのやつてみなくちや……分からぬだろツ!!!」

悟飯はラディイツツに飛びかかる、それをラディイツツは予測したかのように両腕で防ぐ「ほう、ラディイツツの奴強くなってるな」

「ああ！界王拳も使つてないのにすげえ氣だ！」

「どうしたどうした！超サイヤ人つてのはそんなものか!!!」

「チツ・・・ハア!!!」

悟飯が気円閃光弾を放つ、それもラディイツツは軽々と避ける

「違うな！エネルギー波つてのはこうやつて撃つんだよ！ダブルサンデー!!!」

「それだけなら……！」

ダブルサンデー自体の速さはそこまででもない、悟飯は横に避けるがそれは甘い判断

だつた

「横に避けるつて分かつてんだよ！ブーストコントロール!!!」

ラディイツツの一声でダブルサンデーは更に速くなる、だがそれだけじゃない

「ラディッツの野郎、気の扱いを地獄で練習してやがつたか!」

「かめはめ波みたいにぐにやぐにやに曲がるな! すげえ!」

「これが俺の新しい必殺技、ブーストコントロールだ! ほらほら! まだまだブーストかけるぜ!!! 2ギアだ!」

「グツ・・・なんて速さだ!!」

更にラディッツは3ギア、4ギアとスピードを上げていく、遂には悟飯はそれに当たつてしまふ

「グアツッ!!」

「まだまだ追撃行くぜ! これも俺の新しい必殺技だ!」

ラディッツの片手に凄まじい程の気が集まる、それは次第に蛇の形に、そこから更に神龍の様な形へと変化する

「喰らえ悟飯! そして目を覚ませ! ドラゴンツサンデーーー!!」

ダブルサンデーよりも強力な気が悟飯に襲いかかる、悟飯は超サイヤ人が切れ、そのまま氣絶してしまつた

「さあ、次は貴様だカカロツト!!!」

ラディッツ達がこうして戦っている中、チチ達は・・・

「なんでおらを置いて行くんだべ! うわあーーーん!!!」

「まあ落ち着くのだサイヤ人の嫁、ほら、ここにお菓子があるぞ？」

「ここにハンカチがある、涙を拭くのだチチよ」

「異様な光景ね・・・」

「それもそりだらう、何故ならチチのことを慰めているのはコルドもクウラなのだから

「なんでおらだけなんだべ！なあ！」

「いいから落ち着け、カプセルコーヒー・ポレーションのお菓子は絶品だぞ？」

「クウラはお菓子を進めすぎなのだ、ほら、このハンカチで涙を拭くといい」

「ブルマ、あれはいいのか？」

「まあ、仕事もしてくれるし高いところのものを取つてくれたりそこに上げてくれたりするから別にいいんだけど・・・」

驚きなことにクウラやコルドはカプセルコーヒー・ポレーションの仕事をしてくれる、その他にもいろんなことをしてくれるのだ

「だが私達も自分達の家を探さねばな・・・」

「それなら問題ないわ、あんた達私の仕事を手伝つてくれるし家ぐらいなら私が探してあげるわよ」

「恩にきる、そうと決まれば今はチチを慰ねばな」

結局チチが泣き止んだのはラディツツ達が帰つてきてからだつたとか・・・そして時

は遡る——

「今度はオラの番だな！ ハア !!!」

「お前も超サイヤ人か・・・」

「こうなつた俺は手加減できねえぜ？ 行くぞ兄貴イ  
ラデイツツの戦いはまだ終わらない・・・

勃発する喧嘩！目を覚ましやがれラカノン達！

「かかって来い！カカロットオオオオオオオオオオオオ!!!」

「遠慮なきいかせてもらうぜ兄貴イイイイイイ!!!」

悟空は超サイヤ人になることで口調が荒くなる、ラディイツツはそこに勝機があると思つていいようだ

「お前相手には界王拳を使わせてもらうぜ！」

「そんなことさせると思うか?!」

悟空はそんなことさせないと言わんばかりに突撃してくる

「そんなことは分かつている！ハア！」

「何ッ！」

地面に弱めの広範囲気弾を放つ、それによつて誇りを巻き上げて悟空の視界から外れることが出来た

「10倍界王拳!!!」

「チツ界王拳を使わせちまたか・・・」

界王拳を使ったことによつて動きに更にキレが増す、それによつて更に技が早くなる

「今度はこいつでどうだ！ ハア！」

「また埃を巻き上げるだけか？ 気で居場所がバレバレだぜ!!!」

悟空は気を感じる場所へと突っ込んでいく、しかし変な違和感に気づく  
「おかしい、さっきは何で気を隠していたのに今度は感じるんだ・・・」

「それはなーーー」

ラディイツツの声は後ろから聞こえてきた、悟空は後ろを振り向くがもう遅い  
「こいつをぶつけるためだ！！！」

ラディイツツの腕には黄色の気弾、それを腕に纏つた状態で悟空の頬を殴りつける  
「ガハアッ！」

バキイツつと音が鳴つて悟空が叩きつけられる、悟空は悟飯と同様に超サイヤ人が解  
けて氣絶してしまう

「これであとはラカノンさん、あんただけだ」

「強くなつたじやないかラディイツツ、俺も本氣で行かせてもらうぜ？」

これを聞いてラディイツツは界王拳を20倍まで引き上げ、ラカノンは超サイヤ人に界  
王拳の重ねがける

「それがフリーーザから聞いた超サイヤ人に界王拳の上乗せですか」  
「ほう？ 思つた以上に驚いてはないようだな」

ラデイツツはそれについて話すことはなく構える

「確かに、サイヤ人なら拳で語り合うべきだよなああ!!!」

「チチの為にも負けるわけにはいかん! ハアアアアアアア!!!」

2人は最大まで気を高める、ラデイツツの戦闘力は1億程度、ここまでラデイツツを鍛え上げたフリーザも凄いがそれに対しラカノンの戦闘力は50倍×1・5倍、自分の戦闘力の75倍の戦闘力だ、その数値は実に4億5千万、圧倒的にラデイツツが不利だ

「お前は一人で頑張った、だからもう休め」

「そうだな、そろそろ弱虫は弱虫らしく休んでいやがれ弱虫ラデイツツ」

「こ、この声は・・・！」

空からある人物の声が聞こえる、ラデイツツもラカノンもよく知っている人物でその姿は青い戦闘服に包まれている

「懐かしいなラデイツツ、強くなつたじやないか」

「そ、そうなのかな・・・?」

その言葉をベジータは更に続ける

「ああ、前とは比べ物にならない程強くなつた、超サイヤ人に至つた力カロツトやカ力ロツトの息子を圧倒的にねじ伏せた、だがそこにいる原因のバカは一筋縄ではいかん」

「ちよ、ばかって……」

「そしてお前も超サイヤ人になれ、お前はもう弱虫ではない」

「そ、それって……！」

「貴様は誇り高きサイヤ人ラデイツツだ！ サイヤ人なら己の壁を越えてみろ!!!」

「ベジータ……ありがとうな……」

「感動のお話は終わりか？ こつちは超サイヤ人になつてからウズウズしているんだ」

「ラカノンは界王拳を解いて面と面で向き合う

「さあ、貴様の力を見せてみろラデイツツ!!!」

「ハアアアアアアアアアアア……！」

ラデイツツは力を込める、限界まで力を込める、そこには怒りが生じている

その怒りは自分が足手まといになつたから

力カロットの兄として自分が情けないから

フリーザを倒すと決めたのに自分だけ死んでしまつたから

——そんな自分が情けない——

!!!!!! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

「やつとその姿になつたか・・・待ちくたびれたぜ」

「こいつが……超サイヤ人……？力が……溢れてくる……！」

その姿は誰よりも気高く

その眼は誰よりも澄んでいる

その姿はまさに伝説

覚醒 超サイヤ人ラデイツツ

「おひるね」

「でえりやあ!!」

ラカノンの放つた拳をラディッツは拳で弾きかえす、何度もラカノンと組み手をした  
ラディッツだからこそ放つ拳を予測できた

「俺こそ負けねえ！人に迷惑をかけてまで自分たちの喧嘩を突き通すやつらになんか負けねえよ！！」

「ラディッツが超サイヤ人に至る少し前・・・

「ベジータ！あんたラカノン君たちを連れてきなさいよ！」

「ダニイ?!なぜ俺が!!!」

「頼むベジータ王子、わしらからも頼む」

「おねがえしますだベジータさん！悟空さ達を連れ戻してくんろ!!!」

みんなからの視線を受けて「ぐぬぬぬ・・・」と唸ってしまう、ラディッツは自分が生き返らせた瞬間急いで飛んで行ってしまった

「仕方ないな・・・少し待つてろ！このサイヤ人の王子ベジータ様が華麗に連れ戻してやろう！ハーツハツハツハツハー・・・」

# 決着が着く戦い！見せろ覚醒したその力！

「でりやりやりやりやりやりやあ！！！」

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

2人の拳がぶつかり合う、ぶつかるたびに岩や地面にヒビが、衝撃波が発生する  
「いい！いいぞラディツツ！ここまでやるとは思わなかつた！！」

「俺の本気を喰らつて余裕なくせによく言う！いいからかかつて来い！！」

飛んでくる拳を足で、飛んでくる足を拳で弾きかえしカウンターで頬を殴り飛ばす  
「チイツ！ならこいつを受けてみろ！スペニッシュユツーーー」

ラカノンの必殺我が放たれようとする、それを見てラディツツは氣でカーブがかつた  
気の壁を張る

「バスターアアアアアアアアアアアア！！！」

「こいつで跳ね返してやる！！！」

飛んできたスペニッシュユバスターはラディツツの作つた気の壁でラカノンの方に急  
カーブする

「なにい！！！  
??!!」

「ダメ押しのドラゴンサンデーだ!!」

ラカノンのスパニッシュユバスターとラディッツのドラゴンサンデーが合わさる、ドラゴンを模したエネルギー波はその形を変えながらラカノンに突き進む

「ほお? こいつがドラゴンサンデーとスパニッシュユバスターが合わさった技か、これらラカノンもひとたまりもないだろうな」

「止められるもんなら止めてみやがれえ!!」

ベジータの評価に比例するようにスパニッシュユサンデーは大きくうねりながらラカノンに当たりそうになる

「界王拳ッ!!!」

ラカノンは界王拳を使い気合でスパニッシュユサンデーを消し飛ばす

「ハア・・・・ハア・・・・」

「だいぶ疲れているようだな、これなら俺の勝ちか?」

ラディッツの呟きはベジータにも聞こえる、それを聞いてラカノンは口元をにやりとあげる

「ふふふ・・・はつはつはつはつは!!!」

「何がおかしい!!!」

急に笑い出して氣でも狂つたか?とベジータも思う、しかし何かに気づいてベジータ

は叫ぶ

「ツ!! 避けろラディツツ！」

る  
急に叫ばれてラディツツは避ける、その瞬間、ラディツツがいた場所は大きく爆発す

「な  
・  
・  
・  
！」

「チツ上手く避けたか」

「気を付けるラディツツ！よく探ると周りにラカノンの気が充満している！それを所々で爆発しているんだ！」

ベジータの考えはあつてゐる、ラカノンの動きがおぼつかないのはこれの準備をして  
いたからだ

「その通り、さあどうする？　こいつに当たつたら怪我じやすまねえぞ？」

「そんなもの簡単だ！こうすればいい！ハアアアアアアアアアアアアアア・・・！」

「ラデイツツの奴……何をするつもりだ？」

ラディツツは限界まで気をためる、それを見てベジータはあることを思い出す

「こいつは……爆発波？だがこいつは自分の周りに気を張るだけのはず……まさか！」

「不味い！」

ラディツツの体が一瞬光る、その瞬間——

激しい轟音が鳴る、ラデイツツを中心には岩場が更地になる、周りを見つてもラカノンの体はない

「あ、あぶねえ、あんなの喰らつたら怪我じやすまないな……！」

「お前いつの間に！」

ラカノンは悟飯と戦つたようにベジータの後ろにいた、それについてベジータは質問をする

「おい貴様！なぜこうも早く後ろへと回れる！」

「それは俺が瞬間移動を使えるから、あの世にいたときにヤードラット星人に教わったんだ」

「チツまだ普通に喋れる元気があるとは……！」

ラディッツは超サイヤ人が解けて満身創痍、ボロボロの状態だ、それを見てラカノンは意外なことを発言する

「参った、俺の負けだよ」

「「は？」

出てきた言葉は降参の一言、戦闘民族サイヤ人にはあり得ない一言だ  
「ラデイツツは今日初めて超サイヤ人になつていて、もう立つてするのが精いっぱいだ  
ろう、それにその前に悟飯、悟空、2人の超サイヤ人を倒しているんだ、ここまでやれ  
ば十分だろう」

「あ、あははは・・・」バタリツ

「ラデイツツ!」

ベジータはラデイツツを抱える、もう喋るのも辛そうだ

「なあ・・・ベジータ・・・俺はもう・・・弱虫じや・・・ないよな・・・?」

「弱虫なわけあるか!お前は俺達と同じ超サイヤ人へと至つたんだ!いいから休め!」

「ベジータ俺に掴まれ

言われたとおりにラカノンの腕を掴む、その瞬間目の前の景色が変わる

「なに?!」

「悟空さ!悟飯ちゃん!ラカノンさん!」

チチが3人へと近寄る、悟空と悟飯は気絶中、ラカノンは血だらけでボロボロ、ラ  
デイツツもベジータに肩を貸してもらいやく立つていられるレベルだ  
「ベジータ!なんでこうなつてるのよ!」

「すべてはこいつが原因だ」ラカノンを指さす

「なにい?!俺せいじやないだろ!」

「なんだとお・・・?!よくもまあぬけぬけどそんなことが言えたもんだな!お前がコルド  
に心臓をぶち抜かれたから悟飯と喧嘩になりフリーザの時にカカロツトを地球に帰し  
たのが原因だろが!それでもまだ貴様のせいじやないと言うのか!」

「ぐッ・・・」

ラカノンはベジータに色々言われて黙り込んでしまう

「ラ・カ・ノ・ン・さ・ん――――――!!」

「やべ!ちょ!ピツコロ!ピツコロの氣!!あんにやろおこのことどつかで聞いて氣を隠

してやがんな!ほかの奴らも隠してやがる!」

「どこへ行くんだべえ!待つだああああ!!!」

チチに耳を掴まれ奥へと引きずられて行ってしまう

「こ、こいつがカカロツトの嫁か・・・恐ろしいものだな・・・」

ベジータの呟きには他のみんなも共感できるものだった

# 修行の幕開け！みんなで修行大合戦！

「「「「ガツガツムシャムシャズルズルゴクゴク」」」

「ど、どんだけ食べるのよこいつら・・・」

「見て いるこつちが胸焼けしそうだぞ・・・」

「ああ、だがこいつらがやっていることは間違いでない、俺らもさっさと食つて鍛えねばな、サイヤ人に遅れを取るわけにはいかない」

物凄い勢いで口に食べ物を運ぶのは5人のサイヤ人、それを見てブルマ、コルド、クウラは見て いるだけで胸焼けがしそうだつた

「ふはあー！！！食つた食つた！」

「はい！とつても美味しかつたです！」

「う、美味かつた・・・地獄の飯は不味すぎたからな・・・久しぶりで・・・なんだか涙が・・・」

「また腕を上げたなブルマ、今回もまあまあの出来だつたぞ」

「・・・」

4人はご機嫌な様子だがラカノンだけは浮かない様子だつた

「ん? どうしたんだラカノン」

「いや、ちょっとと考え事でな・・・」

「珍しいな、何をそんなに思い詰めることがある」

「ラカノンは飯を食つてる時からずつとこの様子だ、腹にもあまり入らなかつたようだ

※サイヤ人基準

「超サイヤ人が本当に最強なのかを考えていたんだ」

「超サイヤ人が? なんでなの?」

「確かに、それは俺も気になるところなんだが・・・」

※ラデイツツは敬語をやめろと言われています

「だがラカノンの意見は俺も賛成だ、自分でも伸び代があると感覚で分かるからな」

「ねえちよつとコルド、ベジータ達は何を話しているの?」

「わしらには分からぬサイヤ人の悩みというやつだ」

ブルマの質問にコルド話してサラリと受け流していく、そんなことを気にせずにラカノン達は話を続ける

「超サイヤ人は確かに強い、だが燃費が悪いんだよ、これじゃただの倍率の高い界王拳と一緒にだ」

「だから考えていたのか、だったら宇宙船で界王拳をやつたみたいにずっと超サイヤ人

でいればいいじゃねえか』

「お前天才だなカカロット』

「そうと決まれば・・・ハア!!!』

5人は一斉に超サイヤ人へと変身する、この状態の荒々しい状態は5人とも同じのようだ

「これからずつとこの姿な、期間は人造人間が現れるまでだ』

「いいだろう、この天才サイヤ人の王子ベジータ様にかかるべからざるもの簡単だ』

「おつとベジータ、それは俺も負けねえぞ？悟飯とチチの前でかつて悪りい姿見せる訳にはいかねえからなあ』

「お前らはアホか、この姿に慣れる為に超サイヤ人になつているのに喧嘩してどうする』

「気が高まる・・・溢れそうだ・・・これを慣れるようにしないと』

その姿を見てコルドもクウラもラカノン達の考えに気づいたようだ  
「なるほど、そういうことか』

「ならばわしらも・・・ハアアアアアアアアアア・・・!!!』

それを見て2人も変身する、一通りブルマに話しこんだ後には天界へと向かい始めた  
「よう悟空！ラカノン！悟飯！元気だつたか？』

「おうクリリン、俺は元気だぜ』

「あれ？ 超サイヤ人なんて珍しいじゃないか、どうしたんだ？」

「それも兼ねてラカノンが説明をする、それを聞いたクリリン達は納得をしたようだ  
「俺達が宇宙船で界王拳で慣れる為にやつたやつの超サイヤ人版か！ それなら確かに見  
込みもありそうだな！」

「だろ？ それを考えついたカカロットも中々のもんだがな」

「おいおい、そんなに褒めても何もでねえぞ兄貴」

「超サイヤ人の悟空を見たが・・・まさかここまで口調が荒くなるとはな」

口調が荒くなるのに関してはクリリンや天津飯、ヤムチャは初めてのことだった

「仕方ねえだろ？ この姿になると興奮を抑えられねえんだ、今でも戦いたくてウズウズ  
してるぜ・・・！」

「落ち着けカカロット、戦いたいのは分かるが今は超サイヤ人に慣れることが先決だ」

「悟空と違つてラディツツは随分と落ち着いてられるんだな」

「なんでだろうな、俺はこの姿になつても軽く興奮するだけだ」

「いいから修行を始めるぞ、この姿になつていられるのも今日じゃ短いだろう、ならさつ  
さと始めるべきだ」

クウラの言うことももつともだ、ならばさつさとペアを決めてしまおう

「じゃあ俺が決めさせてもらうぜ、まずは俺、ラカノンと悟空とベジータだ」

「ほお～？ ラカノンとカカラットとか、 手加減はせんぞ？」  
「こつちも望むところだぜ・・・！」

「次は悟飯、 ラディッツ、 ヤムチャだ、 特にラディッツとヤムチャは悟飯に気の使い方を  
教えてやつてくれ」

「よろしくお願ひします」

「おう、 よろしくなヤムチャ」

「おうともよ！ このヤムチャ様に任せておきな！」

「次はクウラ、 コルド、 天津飯、 クリリンだ、 クウラとコルドはパワーの使い方を、 天津  
飯はテクニックな戦い方を、 クリリンは気の扱い方を3人で鍛えてくれ」

「よからう、 この俺のパワーをとくと教えてやろうではないか」

「これでもフリーザ一族の王なのだ、 手加減はせんぞ？」

「よろしくな2人共、 出来ることは少ないと思うが善処はしよう」

「こちらこそよろしくな、 僕も出来ることは少ないけど役立たずにはならないぜ」

「じゃあペアが決まつたな、 それじやあ修行開始イイイイイ!!!」

# 修行開始

## ラカノンと悟空とベジータ編

「まずは簡単な組手からだ、いくぞゴラア！」

「かかってこい！」

「負けねえぞ！」

ラカノンの強烈な拳が当たる、それをベジータは受け流すが横から悟空の蹴りが飛び出してくる

「汚いぞ貴様らあ!!!」

「たまたま標的がお前だつただけだ！ならばこつちだ!!!」

「そんなの関係ねえ！俺はベジータを先に叩く!!!」

それぞれがそれぞれを叩く、3人でのサバイバルマッチ方式だが時間が経つにつれベジータがあることに気づく

「なにッ?! おいカカロット！ラカノンはどこだ！」

「ん？確かに、一体どこにいったんだ・・・？」

2人が探そうにもどこにもいない、そもそもここは天界なのだ、隠れる場所も大幅に制限されるだろう、ならば隠れるところは1つしかない

「上か!!」

「正解だ！くらいいいいいいツ!!!」

上に浮上しているのを見つけたと思えば大きな気をためていた、それをラカノンは一  
気に振り下ろす

「やがれええええええええええ!!!」

「不味い！こんなのくらつたら天界ごと吹っ飛んじまう！」

「ゴチャゴチャ言つてる暇があつたらこいつをどうするか考えやがれえええええ  
え！」

ベジータの言い分はもつともである、早くしないと特大なエネルギー弾は天界に当た  
り破壊されてしまう

「分かつてる！かめはめ波アアア!!!」

「ビック・バン・アタツアアアアアツク!!!」

2人の放つたエネルギー波とエネルギー弾は見事に防ぐことに成功する、しかしどこ  
を見てもラカノンの姿がない

「あの野郎どこ行きやがった！」

「待てよ、ラカノンの性格上・・・上だな！かめはめ波!!!」

悟空の予想ではラカノンは先ほどよりも上空にいる、その予想は――

「あぶね！ よく分かつたじやねえか！」

予想は大当たり、しかしその放った攻撃で更に自分たちが追い詰められるとは思わぬだろう

「お前達上を見ていいのか？太陽拳ツ!!!」

上を見ていたベジータはモロに光をくらつてしまふ、ベジータは——

「いつまでもやられてる俺じやねえぞ！でえりやあ…」

「グツ  
!!!  
」

即座に後ろに回つていた悟空に下に叩きつれられてしまう、その攻撃をしている頃にはベジータも視力が回復したようだ

「よくも舐めた真似をしてくれたな！今度はこつちの番だぜ！！！」

ベジータの一撃を紙一重で避けるが上から悟空が降つてくる

「俺もいることを忘れるな！でりやりやりやりやりやりやあ！！」

「ぬおおおおおおおおお！くたばりやがれええええええええ！」

「2人相手は辛いなあ・・・！」

悟空とベジータのラツシユがラカノンに刺さる、一目見れば軽くいなしているように

見えるがそれは防御に徹してゐるからだ、少しでも攻撃の方に意識を集中すればラツシユが当たつてしまふだろう

「どうしたラカノン！」のままだと俺達に負けちまうぞ！」

「黙つてる暇があつたら少しでも攻撃してみやがれ！」

テガノンから発せられた复合砲によって2人は弾かれてしまふ。その際に2人はあることに気づく。

「この気の上がり方は……」

ラカノンの奴め、界王拳を使つていやがるな……」

この気の異常な上昇量は界王拳によるものだ  
煙が晴れる頃には金に紅みかかつた気を纏つてゐるラカノンが現れる

「さあ、第2ラウンド始めようぜ・・・！」

ラカノン達の修行はまだ始まつたばかり・・・

# 修行開始

## ラデイツツと悟飯とヤムチャ編

「カカロット達は修行を始めたな、それでは俺達も始めよう」

「おう！」

「はい！」

「そう言つてラデイツツは氣で壁を張る、これも氣の応用の一つだ

「これが氣の応用の一つ壁だ、俺がラカノンと戦つてる時、必殺技を跳ね返したのがこれにあたる」

「へえ、氣の壁か、確かに今までじや考えられなかつた使い方だな」

「あのラカノン兄ちゃんの必殺技を・・・」

「それをこうすると・・・こうなる」

「ラデイツツは氣の流れを変えた、すると氣の壁は回転を始めた

「ためしに悟飯、なんか撃つてみろ」

「わかりました・・・魔閃光！」

「悟飯の必殺技が壁を突き破る・・・と思ひきやなんと軌道をそれで悟飯のもとに帰つ

てきたのだ

「あぶなッ!!!」

「これがラカノンのスパニッシュバスターを弾くことができた原理だ、悟飯にはここまでとは言わないが近いものを習得してもらう」

「そうだな、じゃあ次は俺の番だ！操気弾ッ!!!」

ヤムチャが気の球を作り出す、そして指を2つ合わせて8の字に動かし始めた

「これが俺の気の使い方、指を動かして気を操るんだ」

「ほう、こういう使い方もあるのか」

「これがヤムチャさんの・・・」

ヤムチャの使い方は気を操る使い方だ、ラディツツの時とは違う使い方でありこれもまた気の可能性の1つでもある

「俺の使い方は気を守りに使う方法」

「俺の使い方は気を攻めに使う方法」

「さあ、どちらも覚えてもらおうぜ？」

「これが僕が覚える使い方・・・」

悟飯はゴクリと喉に唾液を通す、1人は地獄の帝王に鍛えられてやつとの末に編み出した気の壁、もう1人は天下一武道会で優勝するためにと必死に生み出した自分自身の

究極の技、それを悟飯は習得できるのだろうか・・・

「すまん！そつちに流れ弾飛ん出ちまつた!!」

「なにツ?!?!」

ラカノン達の流れ気弾が飛んでくる、突然のことでラデイツツとヤムチャは反応できない、そもそもヤムチャでは超サイヤ人のラカノン達の気弾は止められない

「あぶねえぞ悟飯!!」

「僕だつて・・・僕だつて・・・!!」

その時、悟飯から物凄い量の氣があふれる、あふれ出た氣は上空で大きな壁となつて落ちてくる

「こ、この壁は大きさは・・・！」

「どんでもないデカさだ!!」

「僕だつて出来るんだあああああああああ!!!!」

ラカノン達からの流れ弾を壁は上手く受け流しラカノン達の方に帰つていく

「「「ダニイイ!!!」」

まさか帰つてくるとは思わなかつたのか反応が出来なくなり自分たちに当たる

「ご、悟飯・・・！」

「お前はもつと強くなる！強くなるぞ!!!」

ラディツツとヤムチャの期待は数年後、実現するとはまさか思いもしなかつただろう

# 修行開始

## コルドとクウラと天津飯とクリリン

「ではわしらも始めようとしよう、超サイヤ人程ではないが力には自信がある」

「ああ、俺もスピードには自信がある」

「俺もだ、気を使つたテクニックは任せてくれ！」

「それでは始めるか、構えろ!!」

ザッと音がして4人が構えを取る、先に動き出したのはクウラだ

「キエエエエ!!」

「おつと、いきなり俺か、だが俺も負けん！」

「わしがいることを忘れてもらつては困る！」

「だつたら俺だつて忘れちゃいないよな！ 気円斬!!」

クウラ、天津飯、コルドに三昧の気円斬が飛んでいく、それぞれがそれぞれの方法で防いでいく

「こんなもの上から叩き斬つてくれる!!!」

「氣功砲!!!」

「デスソーサー!!!」

コルドは刃の上から叩き斬る、天津飯は気功砲で粉碎、クウラは紫色の気円斬で気円斬を切る

「破られるのは知っていたさ！これは普通の気円斬じやない！」

コルドの碎いた気円斬が、クウラの切った気円斬が2つ合わさり巨大な気円斬となつてこちら側に返ってきた

「まだまだ！ヤムチャさんと一緒に考えた技だぜ！名付けて操気円斬！！」

「な?!当たると不味い！」

「この大きさでは切ることも出来ん！」

「こうなつたら操つていてる本人を倒せば！」

3人がクリリンに寄つてきて攻撃しようとする、しかしクリリンはそれも対策済みだ  
「それも予想してたさ！20倍界王拳ツ！からのバリアだ！！」

界王拳を使い更に実力を上げるクリリン、20倍ということもあつて操気円斬は紅く  
更に大きく、張ったバリアは強固になる、20倍まで引き上げられた界王拳は簡単に破  
ることは出来ない

「くそ！まさかあのハゲ頭があんなに強いとはな！」

「俺だつて足手まといになるつもりはないんだ！ラカノンや悟空みたいにサイヤ人じや  
なくともここまで出来るんだぜ！」

「確かに凄いなクリリン！だが俺とていつまでもやられるわけにはいかん！新・気功砲  
!!!」

天津飯から連続して気功砲が飛んでくる、それは巨大な気円斬をも碎き、クリリンに張られたバリアにもヒビを入れる程の威力だ

「でかしたぞ天津飯！デスビーム!!!」

「スーパーノヴァ!!!」

ヒビが入ったところにコルドのデスビームが、クウラのスーパーノヴァが飛んでいく、バリアは完全に破壊されクリリンに全ての衝撃が入る

「グッ!!!!」

「これで終わりだクリリン！俺も技を考えていたんだ！かめはめ波とどん波の合わせ技だ！どどはめ波!!!」

天津飯から放たれただどん波とかめはめ波の合体技、どどはめ波はクリリンに更に追い討ちをかけていく

「ツ！！！・・・まいっただ、俺はここでリタイアさせてもらおうかな」

「俺もここでリタイアさせてもらう、さすがに気がカラだ・・・クリリン、天津飯はここでリタイア、しかしそれを見かねたコルドとクウラはここでやめにしようと提案する

「やりすぎても身体を壊すだけだ、なら休めるときに休むべきだろう」「俺も同じ意見だ、今回はここまでだな」

4人を含めた10人の修行は始まつたばかり・・・

# 見せつけられる力！気を感じない人造人間！

「よし、みんな着いたな」

「俺を含めた10人+ピッコロが南の島に着く、ピッコロは俺達とは違う1人で修行をしていたようだ、どうやら新しい技をいくつか生み出していたようでそれを見られたくないかったようだな」

「ようピッコロ！おめえも相当鍛えたようだな！」

「ああ、お前らもだいぶ鍛えたようだな、氣を感じなくともヒシヒシと強さを感じるぞ」  
そんなことを話しながら遠くからヤジロベーがやつてくる、どうやら仙豆を持ってきたようだ

「ほら、おみやーらの為にカリン様が仙豆を持って行けだとよ」

「サンキュー！これで最初からとばしても問題ない！」

「てかなんでブルマはいるんだよ」

「なんであつて人造人間を見る為よ！大丈夫！ちょっと見たらすぐ帰るから！」

ブルマの言い方には少し、いやだいぶ危ない、みんな呆れながら聞いていると天津飯がこう呟く

「……おい、おかしいとは思わないか……？時間を使っているのに敵の気配が全くないぞ……！」

「確かにそうだ、何故だ……？」

ラカノンがこう呟いた瞬間突然ヤジロベーが乗つっていた乗り物が爆発をする、爆発した瞬間2つの黒い影が町に降り立つた

「何故だ？！気は感じることが出来ないはずだぞ！」

「そ、そうか！！人造人間だから気は感じないんだ！！」

『『なにいッ？！』』

驚くのも無理はないだろう、今まで気を感じながら戦いをしていたのだ、急に感じることが出来ない敵が現れれば驚くしかない……2人を除いて

「やつと来たか人造人間！このわしたちが討伐してくれる！」

「待て親父！この俺が殺る！！」

コルドとクウラは町にいち早く到着する

「みんな1グループを作つて散れ！分散して人造人間を探すんだ！」

『『おう！』』

グループは

①俺（ラカノン）、ベジータ

②悟空、悟飯、ピッコロ

③コルド、天津飯

④クウラ、ヤムチャ

⑤天津飯、クリリン

で決まつた

「チツ！マジでいねえ！」

「本当に人造人間なぞいるのか?!」

「氣を感じないなんて本当に厄介だ・・・！」

「早く探しめしよピッコロさん！死人が出でしまいます！」

みんなして探しているとクウラ、ヤムチャペアが怪しい人物を見つける

「おいそこの2人、こちら辺で怪しい人物をーーー！」

「どけヤムチャ！」

クウラがいきなりヤムチャを突き飛ばす、クウラもすぐにその2人から離れる

「ツてえ！何すんだよクウラ！」

「お前こそ何故氣づかん！あいつらから氣を感じないのだぞ!!!」

「なんだつて?!・・・た、確かに！」

そう、見つけてしまつたのだ・・・人造人間を・・・！

# 変えられた未来！人造人間19号！

「ほう、どうやら貴様はわし達に気づくことが出来たようだな」

「チツやはり貴様らが人造人間か！」

「孫悟空はどこだ？隠すと身のためにならないぞ」

人造人間は2人いる、1人目の見た目は皮膚は少し黒くシワシワ、表すとするなら老人だ、2人目は逆にとても白い、少し太く饅頭みたいな見た目だ

「さあ、孫悟空はどこだ、貴様では私に勝つことは出来ん」

「悟空悟空とうるやい奴らだな！俺は気を高めて悟空達を呼ぶ！クウラは少しこいつらの相手をしててくれないか！」

「なら早く呼べ！こいつらが何をしでかすか分かつたもんじやない！」

ヤムチャは全力で気を高める、それに気づいた乙戦士達が集まるのは遅くはなかつた  
「お前達が人造人間か・・・確かに気は感じないな」

「貴様はラカノンだな？そしてその隣にいるのが・・・」

「ああ、オラが孫悟空だ、おめえ達が人造人間だな？ここじや人が多い、場所を変えんぞ」「その必要はない」

饅頭みたいな人造人間がそう答える、すると人造人間達の目が光始める

「不味いツオラア！」

人造人間から放たれたアイビームはラカノンの蹴りによつて上空へと飛んでいく、ラカノンの咄嗟な判断が街をの人を救つたのだ

「てめえら何しやがる！」

「なにか不満でもあつたかな？人がいない場所を作つてやろうとしたのだが」

「いいからオラ達についてこい！」

そう言つて悟空は飛び立つ、それにつられてラカノン達と人造人間達も飛んで行く  
 「おい悟空、どこへんで降りるか決めてるのか？俺の判断じやここあたりがいいと思  
 うが」

「いや、もうちょい先だ、ここら辺は緑が多いから動物が死んじまう」

10分くらいたつただろうか、痺れを切らした老人の方の人造人間が叫ぶ

「いい加減にしろ！貴様らに選択権はない！」

確かにいい加減飛びすぎだ、その分悟空が優しいということもあるのだが

「ここら辺でいいか・・・ここだ！降りろ！」

見た感じは周りは岩場、ラカノンやピツコロが気を探る限り動物もいない

「さあ、早く戦おうではないか、だが貴様らに勝ち目はない、データを取つてあるからな」

「へえ、どこまでのデータを取っているんだ?もしやナメック星までも取つてんじゃなかろうな」

「その心配はない、ベジータ達が来た時点でのデータで足りる」

その言葉にサイヤ人達やフロスト一族はニヤリと口角を上げる

「じゃあおめえらの負けだ、おめえらはオラ達には勝てねえぞ」

「ナメック星までデータを取りに来なかつたのは誤算だつたな」

「ほう?その誤算とはなんだ?わしのデータに間違いはない」

その言葉を聞くとベジータが前に出る、どうやらベジータが戦うらしい

「貴様らに見せてやろう、こいつが・・・ツ!」

そう言つて力を込める、自ずと知れたその変身は誰もが知つてゐる

「超サイヤ人だッ!!」

「なんだと・・・ツ!」

「データ範囲を超えています、どうしますか20号」

明らかに20号と呼ばれた人造人間が狼狽える、だがすぐに落ち着きを取り戻しこう伝える

「このぐらいなら19号がパワーを85、いや、60%開放すれば勝てるだろう」

「そうか、なら試してみやがれえ!!」

ベジータは一気にその距離を詰め、その顔面に拳を叩き込む、饅頭みたいな人造人間、19号が弾き飛ばされ岩の中に埋まる

「貴様の力はそんなものか！もつと俺を楽しませろ!!!」

「舐めるな」

岩場からその巨体が飛び出してくる、ベジータは油断していたためかその巨体に似合わぬスピードで突進してきた頭突きを避けることが出来ない

「ふん！ そうこなくては面白くないツ！」

ベジータが殴る、その拳を止めようと腕を顔に持つてくるがその拳はフェイントで横腹に蹴りがめり込む、しかしおかしい、横腹に蹴りが入れば大抵の人間は痛さにもがく、それこそ気の扱いに長けているものに蹴りが入つてもそこに気を集めて防御すればいい、しかし19号は蹴られつつもベジータに殴り返してきた

「なにい・・・？」

「あいつらは何故ダメージをくらわん！」

「どうか！ あいつらは人造人間！ 痛みを感じないんだ！」

クリリンの考察は正解だ、それが分かるとコルドは口を動かす

「ベジータ王子！ 接近戦では部が悪い！ 気弾を使うのだ！」

「言われなくともそうする！ ハアアアアアアアア・・・ツ！」

ベジータの腕に紫色の気が溜まる、その技はラカノンと悟空が嫌という程くらつた技、ベジータの手に光が放ったと思ったらベジータの体も紫に輝き始める

「こいつがギャリック砲の進化版!スーパーギャリック砲だ!ハアアアア!!!」

ベジータから放たれた特大のギャリック砲、大きさとしては19号を軽く超えている大きさだ、誰もが勝ちを確信している

「・・・ッ!!」

「今更押し返そうとしても無駄だ!そのままぶつ壊れちゃええ!!!」

「ヒヤヒヤ・・・ヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤアアア!!!」

19号が手を伸ばし押し返そうとしたところ、なんとギャリック砲が消えてしまつたではないか

「なんだと?!!」

「これは素晴らしいパワーだ、存分に使わせてもらうぞ!」

19号が先程と同じように突進してくる、しかしスピードは前とは桁違いなほど速い「なに――」

「ヒヤアツ!!!」

気の抜ける掛け替えとともに繰り出されるのは重い拳、やはり先程よりはずつと強い「なぜだ?なぜあいつがあんなに強くなっているんだ・・・?」

「も、もしかして！ベジータさん！氣弾も使っちゃダメです！そいつらはきっと氣を吸収して自分の力にするんだ！」

「なんだと・・・？」

「ハツハツハツハ！その通りだ孫悟飯よ！わし達には打撃も氣弾も効かぬ！それよりもいいのかベジータよ、”後ろに19号がいるぞ？”」

ベジータは油断したために背後を19号に取られてしまう、本来のベジータならこれを振りほどくにはわけないだろうが様子がおかしい

「は、はなしやがれえ・・・！」

「ベジータの気がどんどん落ちている・・・氣を吸収されているのか！」

「ベジータ王子！早く離れるのだ」

しまいには氣を吸収され尽くされベジータは地上に叩き落ちる、超サイヤ人も切れておりまさに絶体絶命と言うべきだろう

「これで一人片付いた、次は誰だ？この私に勝てるといいな」

19号はベジータに勝つてしまつた、そして超サイヤ人の力を吸収した19号は先ほどよりも強い

「ふむ、ならこの俺が行こう、貴様らを見つけた時からその薄ら笑いをズタズタに引き裂いてやりたかったところだ・・・ツ！」

次の相手はクウラだ、この2年間で何が変わったのだろうか、それを知るには次の戦いで分かるだろう・・・

# 圧倒的な帝王！俺様がクウラ様だ！

「さあクズ鉄の人形共が……この俺様が次の相手だ！」

「ハツハツハツハ！やつてしまえ19号よ！」

20号の一声で19号はクウラに拳を構えつつ突進していく、クウラはすでに最終形態へと変身しており準備は万端だ

「確かに先ほどよりだいぶ早いな、だが捉えられない速さではない」

クウラは簡単に見切ることが出来た、それを見て20号は驚きを隠せない

「何故だ？！ベジータのパワーを吸収して120%は早くなっているはずだ！」

「た、確かになんでだ？見ただころ2割増しぐらいにしか見えないが……」「当たり前だクリリン、俺達超サイヤ人の力が全て奪えるものか、それこそオーバーヒートしちまうぜ、なんならその気を持たせてやるよ、こっちにきな」

ラカノンは超サイヤ人へとなりほとんどの気をクリリンに渡す、渡されたクリリンは腕に留めておく事が出来ずに全身から汗が噴き出す

「な……?!」、これがあいつの中に全部……？！そりや無理だな……！は、早く回収してくれないか……う、腕が限界なんだ！！」

「悪い悪い、だが分かつただろ?」

「オラ達の力を全部貯めることは無理だあ! なあベジータ!」

「・・・ふんツ!」

今はもう仙豆を口にしたベジータは元気だ、奪われた氣も回復している  
「どうした?まさか人造人間つてのはこんなものなの?だとしたら期待外れもいいと  
こだ」

「調子に乗るな!」

先ほどと同じように19号は突っ込んでくる、それに対しついにクウラはツツコミを  
始める

「お前はバカのように突っ込むことしか出来んのか?攻撃とは、こうやるのだ!!!」

「ゲヒヤア!!」

クウラの一撃を喰らい地面に叩きつけられる19号、叩きつけられたところにクウラ  
は近づいて更に追い打ちを放とうとする

「ゲヒヤヒヤヒヤヒヤ! 捣んだあ! もう離さないぞお!!!」

「そうか・・・なら――」

クウラの口角はニヤリと上がる

「離すなよ?」

クウラは掴まれた腕を軸にして19号の顔を足でミシミシと突き放そうとする

「クウラの奴・・・まさか腕を引き千切る気が?!」

「ひやーマジかあ！クウラのやつすぐえこと考えんなあ！」

「喜んでいる場合じやないぞカカロット、早くしないと俺のように気をすべて吸収されてしまう」

クウラと19号の方を見るがクウラは余裕の表情だ、それに比べて19号は焦ったような表情をしている

「どうした？絶対に離すんじゃないぞ？」

「は、離すもんか・・・絶対に離すもんか！」

「そうか、だが俺もそろそろ飽きてきたんだ、フググググツ・・・!!!」

クウラは一気に力を込める、すると19号の腕はベキツ！つと音がして両腕が壊れてしまった

「ひ、ヒイイイイイイイ!!!」

「おつと？どうやら人形でも恐怖はするようだな」

「に、逃げるのだ19号！」

20号は焦つて指示を出す、そんな指示を聞く前に19号は逃げ出していた

「まあ、逃がす気はないがな」

クウラは空中に飛びあがつてスーパーノヴァを空中に作る

「死ねえええ  
!!!」

「ウ・・・ア・・・アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア・・・」

「やつたじやねえかクウラ！おめえすげえぞ！」

じゅ、19号が……私の最高傑作が……！」

「貴様ら喜んでいる場合か！まだそこに一人いるんだぞ！」

— そ う だ ! 油 断 す る な !

まるで忘れていたと言わんばかりな表情をする  
ヘシータとテカノンとヒツ二口は呆れる

「）、こうなつたら17号と18号を起動させるしかない!!!」

「なにい？まだクズ鉄が増えるのか、いいだろう、さつさと起動させて来い」

「おいクウテ！でめえ何言つてやがる！さつきの奴を倒したからつて天狗になるな！」

20号は自分の気を煙幕に使い逃げる、それを見たラカノンは苦虫を潰したような顔になるしかなかつた